

アイヌ文化展示施設「エカシケナル」関連の新資料

—2019年度新収蔵資料の紹介—

大坂 拓・小川正人

目次 はじめに

- 1 「エカシケナル」関連資料
- 2 同時代の出版物等にもみるエカシケナル
- 3 小倉氏と研究者の関係を示す資料

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、エカシケナル (Ekashi-kenru)、長万部 (Oshamanbe)

はじめに

本稿では、長万部町で新聞「長万部民報」を刊行していた小倉範三郎氏のご遺族、小倉博子氏より、2018（平成30）年12月18日付で寄贈を受け2019（令和元）年10月1日付で登録した資料の中から、アイヌ民族関連写真資料62点を紹介する。

1910～1930年代にかけて、北海道各地に相次いでアイヌ民族の「伝統文化」を展示する施設が建設された。その中には旭川市や白老町のように、いくつかの変遷を経つつ現在まで活動が継続してきている地域がある一方で、比較的短い期間のうちに活動を終えたとみられる事例も少なくない。短命に終わった施設はまとまった資料が少ないこともあって、設置時期や運営へのアイヌ民族・和人双方の関与の様相などが十分に把握されているとは言い難く、今もって基礎的な事実の確定が重要な課題となっている。

こうした問題意識のもと、筆者らは一昨年、1928年に釧路市春採に建てられた「懐古館」に関連する資料を紹介した（小川・大坂 2018）。また、小川はかつて、古原敏弘とともに、1931年に当時の長万部村川向（図1）に建てられた「エカシケナル」について事実の整理を試みたことがある（古原・小川 2009）。

今回寄贈された写真資料を旧蔵していた小倉範三郎氏は、戦前の名取武光氏や鷹部屋福平氏らの著作の中で長万部のアイヌ民族との仲介者として頻繁にその名が登場し、「エカシケナル保存会」の幹事として活動していたことも知られてきた人物である。資料には、新聞記者でもあり、様々な資料の収集家でもあった小倉氏の手によ

り、撮影日時や場所、被写体の人名などの詳細な注記がなされているものが数多く含まれ、細かな年代幅で活動の推移を伺い知ることが可能であり、「エカシケナル」に関する従来の知見を大きく補完するものと言える。



図1 本稿関連地図
(1930年9月陸地測量部発行地形図『長万部』を一部改変)

表1 資料一覧

収蔵番号	頁	枝番	種別	アルバムキャプション	裏面記載
185189	2		写真		昭和十四年／鷹部屋博士ヨリ御寄贈
	3		写真		
	4		写真		静内
	5		写真		日高静内 平取
	12	1	写真		花嫁の持参するイタルカマスを背負たる図／タールと云ふ背負縄にて頭部のみにて背負ふ／小児を背負にタールの先きへ木を横に結び／頭で受けて背負ふ事を（サバエスケ）／両腕を下げ胸にて受けて背負ふことを（ヌメシケ）／ニダン／両端を切り
	12	2	写真		ニダン三文字アキ／〔個人情報削除〕
	12	3	写真		婦人の座り方（ホムサオマレ）／挨拶する姿勢（ヤイカタヌア）／斜に座り片足の先きを横へ露はす／全景／一たん／真四
	13	1	写真		昭和十二年五月撮影／〔個人情報削除〕
	13	2	写真		長万部村川向アイヌ部落ニテ／皆既日食ニ祈願スルアイヌ
	14		写真		
	16		絵葉書		北海道帝国大学農学部附属博物館／名取武光／謹呈 小倉範三郎様／昭和十三年六月二日旧五月節句／河村仙太郎撮影／参列アイヌ 〔個人情報削除〕
	17		絵葉書		北海道帝国大学農学部附属博物館／名取武光／謹呈 小倉範三郎様
	18		絵葉書		北海道帝国大学農学部附属博物館／名取武光／謹呈 小倉範三郎様
	19		写真		昭和十八年戦勝祈願祭／拾貳月八日／前列右ヨリ／江賀寅三／司馬力弥／〔個人情報削除〕／小倉／〔個人情報削除〕
	22	1	写真		
	22	2	写真		
	23	1	写真		
	23	2	写真		
	24		写真		
	25	1	写真		
	25	2	写真		
	26		写真		昭和十一年十月廿九日／小島教三氏撮影
	27		写真		
	28	1	写真		昭和十一年十月二十九日／小島教三氏撮影
	28	2	写真		昭和十一年十月廿九日撮影
	29		写真		
	30		写真		
	31		写真		
	37	1	写真		
	37	2	絵葉書		アイヌ古代の家エカシケンの全景（エカシケンとはアイヌ語で祖先の尊き家と云ふ義）
185190	1	2	絵葉書		The Ainus, aborigines of Hokkaido.
	3	1	写真		昭和十年九月四日／佐上長官上京途次
	3	2	写真	佐上長官退道記念	昭和十一年四月廿八日／前長官佐上信一氏／退道の途次長万部駅
	4	1	写真		長万部にて 昭和十五年八月三日写／長万部小倉氏宅前にて／小倉範三郎と山根徳太郎
	8	2	写真		ヘレンケラー及／トムソン女史／昭和十二年六月廿二日北海道長万部／駅ホームにて撮影／アイヌ 〔個人情報削除〕 八十三才を触感を／以てトムソン女史より説明を聞き感知し居れり／〔個人情報削除〕アイヌ名は（イベツ）／（イベ）は喰ふ（ツ）は延びる或は／成長の意／左端は案内者野坂保三氏夫妻／小倉範三郎アイヌを紹介し且つ／説明撮影せしむ／アイヌの冠り居るは儀式用で（サバウンベ）／着物は（チカルカルベ）或は（チカルカルアマツツ）
	9	2	写真	田中検事長西村検事正	昭和九年十月廿一日／田中検事長 西村検事正 中野八雲署長
	11	1	写真	徳川侯爵	昭和六年八月三日エカシケル観覧／徳川義親侯爵
	11	2	写真	古市男爵	昭和九年八月廿一日／古市男爵
	19	1	写真	廣田総理大臣	昭和十一年十月七日／廣田総理大臣
	19	2	写真	潮内務大臣	昭和十一年九月二十三日長万部駅ホーム／内務大臣潮恵太郎閣下／外内務省高官連其他
	21	1	写真	林司法大臣	昭和十一年十月十日／林司法大臣
	21	2	写真	寺内陸軍大臣	向かって右より／〔個人情報削除〕 八十二才／司馬力弥五十七才／陸軍大臣／小倉範三郎六十八才／〔個人情報削除〕 六十二才／昭和十一年十月九日／寺内陸軍大臣
	23	1	写真	小川商工大臣	昭和十一年十月一日長万部駅前／商工大臣小川郷太郎閣下
	25	1	写真		昭和二十年一月十日
	26	1	写真		昭和九年十月廿一日／田中検事長 西村検事正 中野八雲署長
	29	1	写真	小樽旅行団	昭和十年十月十二日／小樽旅行団
	29	2	写真	余市観光団	昭和十年十月十三日／余市旅行団
	30	1	写真		
	31	2	写真		恵存／小倉範三郎様／日華製油 川村幸雄／昭和十一年十月 九月二十四日撮影
	33	1	写真		
	33	2	写真		昭和十一年八月二十五日／伊藤利孝氏自写
	33	3	写真		
	33	4	写真	古賀伊勢艦長	昭和七年七月十三日／古賀峯一中将／伊勢艦長一行／山本同機関長／佐藤同運用長／金剛艦主計町齋藤胤雄／伊勢副臼砲長加藤氏
	33	5	写真		
185193	9	1	写真		昭和十一年六月十三日／来村／新村長／田中作平氏ハ直チニ／村社飯生神社ニ参拝ス／神官の右が田中
	14	1	写真		向かって左より／〔個人情報削除〕／昭和八年二月廿四日撮影
	14	2	写真		
	16	1	写真		アンドルー・エン・ネルソン／ダブルユー・ビー・ブラドリー
	27	1	写真		
	48	1	写真		昭和十七年九月五日撮影／旭橋渡り初メ式／長サ五十六間／架橋担当押見豊蔵／工費金三千円
185196	67	1	写真		昭和十四年／長万部森林防火組合無事故記念
			写真		更ニ賜 小倉範三郎君／呈 谷平助君／大正三年十一月白井芳筑／室蘭支庁長殿／明石土人組合長宅／訪問記念

サイズ	図版番号	備考
15.9cm×13.1cm	図15：1	被写体の資料は鷹部屋福平氏が論文掲載を目的に製作した模型で、現在は北海道博物館収蔵番号27129
16.4cm×12.1cm	図15：2	「アイヌ住居の研究」(鷹部屋 1939b)「第3図 長万部エカシケナル小屋組の図 (小倉範三郎氏蔵)」と同一カット
16.4cm×12.0cm	図16：3	
16.4cm×12.0cm	図16：2	
6.8cm×9.8cm		裏面に編集指示あり、記事掲載写真か、非公開
5.8cm×8.6cm		裏面に編集指示あり、記事掲載写真か、非公開
9.5cm×7.0cm		裏面に編集指示あり、記事掲載写真か、北海道博物館所蔵の荷縄、棒箸等が写る、非公開
7.5cm×10.2cm		非公開
10.7cm×14.9cm	図9：1	
10.7cm×14.9cm	図9：2	司馬力彌氏、司馬ハル氏夫妻
15.0cm×10.8cm	図15：4	「噴火湾アイヌの捕鯨」(名取 1940)「第五図」と同一カット、裏面は非公開
15.0cm×10.8cm	図15：6	「噴火湾アイヌの捕鯨」(名取 1940)「第八図」と同一カット
15.0cm×10.8cm	図15：5	「噴火湾アイヌの捕鯨」(名取 1940)「第九図」と同一カット
15.4cm×11.2cm	図13：2	「第二次世界大戦期における『戦勝祈願』のカムイノミをめぐる」(小川 1995：125)に記載の行事、裏面は非公開
10.9cm×8.3cm	図12：6	八雲町、長万部町の住民が写る
11.1cm×7.8cm	図12：1	
9.8cm×6.8cm	図7：3	エカシケナルⅢ期カ
13.6cm×9.4cm	図3：3	絵葉書(図17：2)及び1931年8月30日付報知新聞北海道樺太版8面掲載写真と同一カット
15.3×10.5cm		非公開
7.4cm×10.8cm	図12：7	「八雲町高橋」の押印
8.5cm×13.3cm	図7：4	
14.8cm×10.8cm	図7：2	
15.2cm×10.8cm	図4：4	
10.2cm×14.8cm	図9：3	司馬ハル氏
10.0cm×14.6cm	図9：4	司馬ハル氏
14.7cm×10.3cm	図12：3	絵葉書『アイヌ風俗熊送り実況絵葉書 八枚組』其三～七(図18・19)と一連のカット
15.3cm×11.4cm	図12：2	絵葉書『アイヌ風俗熊送り実況絵葉書 八枚組』其三～七(図18・19)と一連のカット
15.6cm×11.2cm	図12：4	絵葉書『アイヌ風俗熊送り実況絵葉書 八枚組』其五(図19：1)と同一カット
15.3cm×11.2cm		185189-3と同一カット
14.1cm×9.0cm	図3：1	1931年8月30日付報知新聞北海道樺太版8面、及び絵葉書『アイヌ古代風俗エカシケナル(祖先の尊き家)絵葉書五枚組』の一枚(図17：2)、185189-1-2と同一カット
13.8cm×8.7cm	図3：2	1931年8月30日付報知新聞北海道樺太版8面、及び絵葉書『アイヌ古代風俗エカシケナル(祖先の尊き家)絵葉書五枚組』の一枚(図17：2)、185189-37-2と同一カット
14.7cm×11.0cm	図10：1	佐上信一、司馬力彌氏他、司馬氏着用の衣服は現在、北海道博物館収蔵番号124648
14.7cm×10.0cm	図10：2	佐上信一、司馬力彌氏他、司馬氏着用の衣服は現在、北海道博物館収蔵番号124648
7.9cm×11.6cm	図8：3	考古学者の山根氏着用の衣服は現在、北海道博物館収蔵番号124648、足元の行器は同124638
14.7cm×10.8cm	図11：4	1937年6月25日付函館タイムス2面「ヘレンクラウ女史アイヌと交歓 長万部驛頭の感激」及び同日付函館新聞8面「ケラー女史アイヌと会見」掲載写真と同一カット、武田之三郎の名刺が挟まる、裏面個人情報削除
15.3cm×10.0cm	図4：2	1934年10月27日付函館毎日新聞夕刊4面「検事長一行アイヌ部落視察」掲載写真、185190-26-1と同一カット
15.0cm×10.8cm	図8：1	
13.4cm×8.5cm	図4：1	
14.3cm×9.9cm	図11：1	
14.9cm×10.2cm	図10：3	司馬力彌氏他、司馬氏着用の衣服は現在は長万部町教育委員会所蔵
10.1cm×6.8cm	図11：3	
14.2cm×10.2cm	図11：2	司馬力彌氏他、司馬氏着用の衣服は現在、北海道博物館収蔵番号124648、裏面は一部非公開としてトリミングした画像のみ掲載
15.2cm×11.2cm	図10：4	司馬力彌氏他、司馬氏着用の衣服は現在は長万部町教育委員会所蔵
14.6cm×11.0cm	図15：3	「日本民俗学北海道地方大会会場 三階三〇五号」の看板、小倉とともに河野広道、更科源蔵らが写る
15.5cm×10.8cm	図4：3	函館毎日新聞1934年10月27日夕刊4面「検事長一行アイヌ部落視察」掲載写真、185190-9-2と同一カット
15.0cm×10.8cm	図5：1	
14.7cm×11.0cm	図5：2	
15.1cm×10.8cm	図4：5	
14.6cm×11.0cm	図7：1	裏面記載は撮影日のみ筆跡が異なり、小倉氏による加筆と見られる
5.6cm×8.8cm	図6：2	エカシケナル復元倉前で撮影、小倉範三郎氏他1名、33-2と同一人物が写ることから、1936年8月25日撮影か
5.7cm×8.3cm	図6：1	司馬力彌氏、小倉範三郎氏他1名
8.1cm×5.7cm	図3：4	33-4と同一人物が写ることから、1932年7月13日撮影か
8.1cm×5.8cm	図3：5	1932年7月15日付八雲新報3面「海軍将校来村」に関連
8.6cm×5.6cm	図6：3	エカシケナル復元住居前で撮影、小倉範三郎氏他1名、33-2と同一人物が写ることから、1936年8月25日撮影か
10.3cm×7.3cm	図14：1	司馬力彌氏他
14.7cm×10.5cm	図16：4	後列左端小倉範三郎氏、裏面は非公開
15.2cm×9.7cm	図12：5	複数人の着衣に「八雲町遊楽部川鮭魚蕃殖組合」の文字が見えることから八雲町遊楽部で撮影されたものか。後列中央付近に小倉範三郎氏
10.5cm×7.4cm	図8：2	エカシケナル(Ⅰ期カ)の復元住居前で撮影、
15.0cm×10.8cm	図14：2	司馬力彌氏他、「長万部小学校六十周年記念祝賀会役員／昭和十三年天長節撮影」の写植
14.3cm×10.1cm	図13：1	司馬力彌氏、司馬ハル氏夫妻他
14.5cm×10.2cm	図14：3	司馬力彌氏他、裏面に編集指示あり、記事掲載写真か
22.2cm×17.0cm	図16：1	虻田町のリーダー明石和歌助邸宅内部、室内の装飾などに関して「アイヌ屋根の研究と其構造原基體に就て」(鷹部屋 1939a：161)に記載あり、計測値は台紙含む

寄贈資料は、写真や葉書が収められたアルバム7点（収蔵番号185189～185195）、写真11枚（同185196～185206）、絵葉書1枚（同185207）、その他1点（同185208）からなる。それらの中で今回取り上げる資料をまとめたものが表1である。表1では、アルバムに収められた個々の写真は「アルバムの収蔵番号-頁-頁内の枝番」の形で表記し、手書きのキャプションが付記されている場合には「アルバムキャプション」の項目に記載した。

また、「エカシケナル」に関係する情報として、これまで紹介されてこなかった『函館毎日新聞』、『小樽新聞』掲載記事の主なものを表2にまとめた。これについては山田伸一氏より多くの教示を受けた。なお表1、2ともに記載中の旧字は原則として新字に改めた。

資料の掲載にあたっては、人物が大きく映ったものはご遺族に掲載の同意が得られたもののみを対象とし、子供が鮮明に映ったものはご本人が現在もご存命である可能性を考慮して除外した。また、写真裏面にアイヌ民族の住所や氏名が記されたものはこれを除外する措置を施した⁽¹⁾。

本稿は、はじめに・1・3を大坂が、2を小川が執筆を担当し、それぞれの脱稿後に両者で全体を確認し、表現を調整した。

1 「エカシケナル」関連資料

(1) 「エカシケナル」の建造物の変遷

撮影日時の情報が伴う資料により、施設の変遷からエカシケナルの活動を便宜的にⅠ～Ⅳ期に区分して記述する。各期の施設の変遷は図2に示した。

Ⅰ期（1931年～1933年？）

図3：3は「長万部エカシケナル保存会」が発行した『アイヌ古代風俗エカシケナル（祖先の尊き家）絵葉書五枚組』のうち一枚（図17：2）と同一の写真である。1931（昭和6）年8月30日付報知新聞北海道樺太版8面に同一の写真が掲載されていることから、現時点ではこれを撮影時期の下限と見ることができる。1931年7月15日付八雲新報3面には「エカシケナル」が「目下建設中」との記載があり、7月25日付八雲新報3面では「去る廿日落成」と記載されていることから、本資料の撮影時期は1931年7月下旬から8月のあいだに絞り込むことができる。

図3：1・2は、先にも触れた絵葉書5枚組に含まれる

もの（図17：1）の類例で、それぞれ日本語と英語のキャプションが付されている。図3：3と住居の形態や祭壇に掲げられた木幣類が一致していることから、これらはほぼ同時期に撮影されたものと見られる。

この時期の復元住居は、浜堤上に小高く盛り上がった灌木林に隣接する狭い平坦地に神窓を噴火湾側に向けて建てられており、建物の南側には二ヶ所の窓を設け、南東側には熊檻と高床式倉庫が併設されている。住居の南側にも地面の高まりがあるようにも見える（図2：上段）。

図3：5は1932（昭和7）年7月13日に、函館停泊中の⁽²⁾軍艦伊勢、金剛より海軍士官が訪問した際に撮影されたもので、背景には前年と同じく、二ヶ所の窓を持った復元住居が確認できる。

Ⅱ期（1933年？～1934年）

1933年の写真は小倉氏の写真資料中には含まれておらず、続いて1934（昭和9）年8月21日、10月21日の日付が記載されたものが確認されている（図4：1～3）。この時期とⅠ期との最も目立つ差異は、復元住居南側の窓が一ヶ所に減少していることである。玄関と海側の出入り口の間にバランスよく配置されていた二ヶ所の窓に代わって、南側壁面のほぼ中央に一ヶ所のみ窓が設けられている。日時の情報を欠如するものの、復元住居に同様の特徴が確認できる2点（図4：4・5）も同時期のものと考えられ、高床式倉庫が住居の南西側に移っていることが分かる。祭壇の状況は不明である。

この時期には、Ⅰ期に認められた復元住居東側の林が確認できなくなるとともに、南側も広い平坦地になっているように見える。写真からは、復元住居は川向集落の西を流れるボクサタナイ川に面した浜堤端部に建てられていたことが確認できる。樹木の伐採や整地がなされた可能性のほか、復元住居の位置そのものが移転されていた可能性も考慮しておく必要がある。

Ⅲ期（1935年）

翌1935年になると、10月12日、13日の両日に比較的大規模な観光客を受け入れたことを示す写真が残されている（図5）。この時期には、Ⅱ期にいったん減らされた復元住居の窓が再び二ヶ所に改められている。復元住居東側には、熊頭骨と見られるものが噴火湾岸を向けて立てられており、祭壇が存在したことも明らかである。

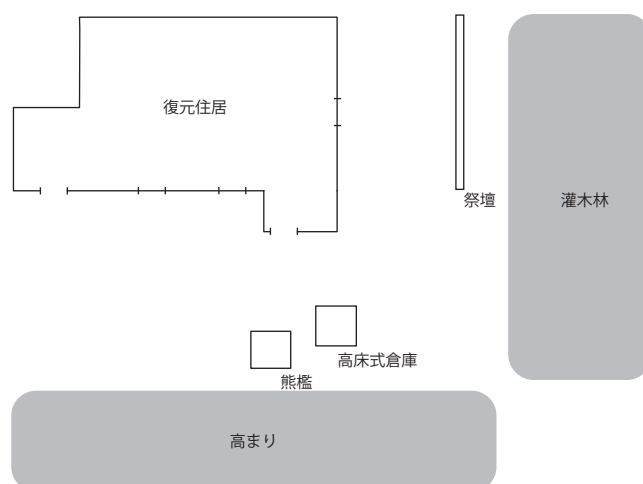
Ⅳ期（1936年）

図6：3は、裏面に日時の情報が伴う図6：1と同一人

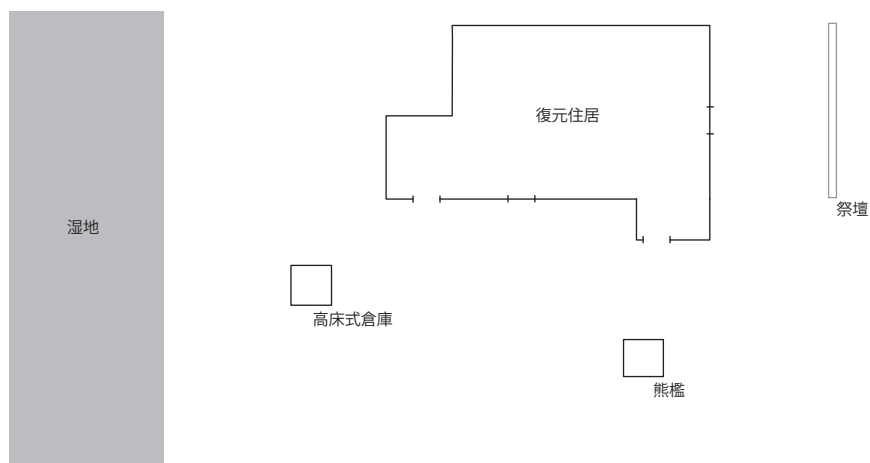
(1) 資料の北海道博物館での公開にあたっては、個人情報の保護のため、表面の画像プリントのみを対象とする。

(2) 1932年5月15日付『八雲新報』3面「海軍将校来村」記事による。

〈Ⅰ期〉



〈Ⅱ期〉



〈Ⅲ・Ⅳ期〉

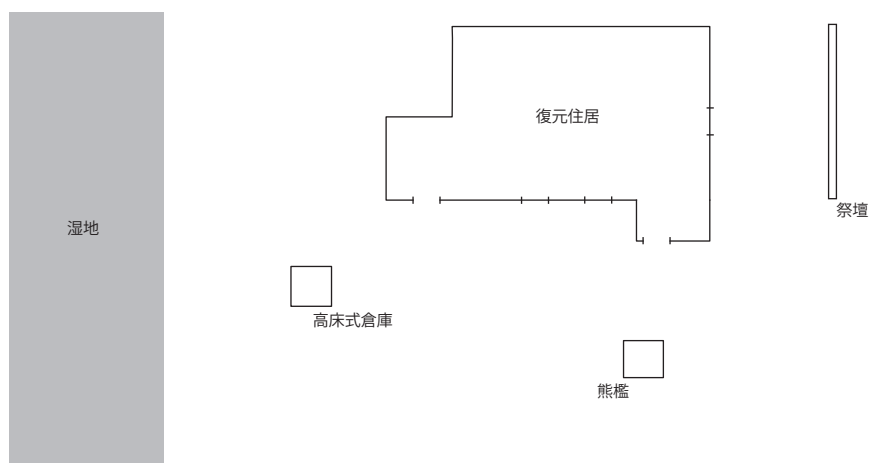


図2 エカシケナルの時期別模式図

物が同じ服装で被写体となっていることから、それによって日時を推定した。この時期の復元住居はⅢ期と大きな差異はないものの、玄関部分の茅葺がⅠ段に改められている点が異なる。

(2) 頻繁な変更の背景とその影響

建造物の変遷から、「エカシケナル」は1931年の落成から1936年にかけて、頻繁かつ場合によってはかなり大規模な改築を経ていることが明らかになってきた。とくに、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期にかけての窓の構造の変化を伴う改築は単なる茅の葺き替えに留まらない作業量の大きなものであり、運営に携わる者にとって大きなコストとなったことが想像できる。

それにも拘わらずこうした変更が繰り返された背景をうかがわせるものに、北大植物園・博物館所蔵写真資料(図20)がある。この一群の写真は、残雪や積み上げられた木材の有無から、やや時期を置いて撮影されたものと見られるが、復元住居東側の窓が二ヶ所であること、熊檻と高床式倉庫がともに住居南東に配置されていることから、いずれもⅠ期の姿を捉えたものであることは間違いない。図20:1・2・5は1933年11月26日撮影とされており(加藤編 2012:160)、小倉氏の写真で欠落する時期の姿を捉えている点で重要である。

ここに写る復元住居は屋根が大きく窪み、高床式倉庫は茅葺の大部分が剥がれ落ちるなど、大規模な破損を被っている。破損が生じた原因には強風や積雪が考えられようが、Ⅰ期からⅡ期への変更は、1932年7月から1933年11月の間に生じたこの大規模な破損を復旧する中で生じたものと見られる。

今回寄贈された資料群の中では、1936年を最後として「エカシケナル」の写真が途絶える。1937年5月22日付函館毎日新聞2面には、「エカシケナル」が「今日では全く有名無実の存在となって」おり、その要因は「強風のため破壊」したこととされている。小倉氏の写真資料群そのものは、1942年の旭橋渡り初め式(図13:1)、翌1943年12月の「戦勝祈願」の儀礼(図13:2)など、途切れることなく継続していくことから、「エカシケナル」に関わる写真の断絶は偶然の資料の欠落ではなく、この時期をもって復元住居を中心とした展示施設としての活動が停止したことを反映しているものと考えるのが妥当だろう。1952(昭和27)年10月30日付で小倉氏の札幌への転居を伝えた道南新報2面掲載記事に

は、「昭和十一年頃まではエカシケナルの管理に当たっていた」との一文があることも、この推測を支持する。

なお、上述した1937年5月22日付の新聞記事では、地元のアイヌ民族の動きとして、「保存会に対して再建を切願したるも経費なきを理由として復活をみず、今日各方面より相当多くの参観人あるも破壊せられているためその目的を達する能わず、此処に於て、同アイヌ部落民は保存会に於て復活が不可能ならば自分等の手で復活すべしと申出たるも何等の答もなく、止むを得ざるので旧土人組合評議員代表司馬氏は去る十二日渡島支庁に石川支庁長を訪れ『エカシケナル』の永久保存方を陳情した」と記されている。

このような記述は、地元のアイヌ民族の「エカシケナル」への期待や存続への意思を裏付ける可能性があるものとして興味深いものの、請願や記事化の過程で観光施設としての役割を期待するアイヌ民族以外の意向がどの程度働いているのかといったことを検討する材料がない現状では、ここでこれ以上に踏み込んだ評価を加えることは難しい。「エカシケナル」運営に関与していたアイヌ民族の側では、和人に対して伝統文化を見せることに對してどのような価値付けがなされていたのか、その価値付けが「エカシケナル」の施設の維持・管理や舞踊の実演、解説に投じられるコストが見合うものとみなされていたのかといった点を、漁業を中心とする生業の状況と複合的に明らかにする努力を積み重ねることで、長万部町のアイヌ民族が生きた近代に関する知見をより深めていくことができるだろう。

(3) 熊送り儀礼・興行

資料の中には、熊神の頭骨を掲げた祭壇に木幣を捧げる姿や熊の解体の様子など、熊送りに関するものも含まれている。図12:2~3は会場の風景や人物の服装の一致から、一連の儀礼を撮影したものと考えられ、さらに、「エカシケナル保存会」が発行者として記された『アイヌ風俗熊送り実況絵葉書八枚組』(図18・19)⁽³⁾の其三~七とも同一、ないし一連のものを含んでいる。

ただし、この絵葉書八枚組のうち熊檻の前で祈る人物と観客を写したもの(図18:2)は、雪が積もり人々も厚着であることから冬に撮影されたと考えられる一方、広大な広場での儀礼に写る人々は薄着であり、全ての写真が一連の行事を写したものと考えることはできないことに注意が必要である⁽⁴⁾。

(3) 本資料は「北海道長万部 エカシケナル保存会発行」と記載された袋に収められているが、袋については紙幅の都合で掲載できなかった。

(4) 図18:2の写真については、函館市教育委員会の大矢京右氏より、同時期に撮影されたと考えられる写真資料が函館市中央図書館に複数所蔵されていることをご教示いただいた。これらの写真の中には、1912(大正元)年12月15日に長万部町で開催された函館毎日新聞社主催「アイヌの熊祭り観覧会」を報じる同紙の連載記事「アイヌ熊祭画報」掲載のものと同一、あるいは連続するカットが多数含まれることから、撮影時期が特定可能である。今回はあくまで寄贈を受けた資料の紹介を主とするため、これらについてのまとめた言及は別の機会とさせていただくこととし、本稿をとりまとめるにあたってこのような多くの貴重な教示をいただいていることを謝意とともに記すにとどめる。

新聞記事からは、1935年2月には「エカシケナル」で狩り熊の送り儀礼、同年8月には寿都町で熊送り興行を行っているほか、1936年10月25日には岩内町、1937年7月2・3日には函館港祭りで熊送り興行を実施し、1939年1月29日には再び「エカシケナル」保存会主催の熊送り儀礼が実施されていることが確認できる（表2）。

このように頻繁に儀礼・興業が実施された中で、今回の資料に含まれる写真がそれぞれどこで撮影されたものか、現状では特定することができないものが多い。

2 同時代の出版物等に見る「エカシケナル」

「エカシケナル」や長万部のアイヌの人々に関する同時代の記録については、2009年に古原敏弘とともに当時確認できたいくつかを紹介し、本稿でも主に山田伸一氏の提供により、多くの新聞記事をまとまって紹介することができた（表2）。ここでは、それらを補う意味で、当時—1930年代—の出版物に掲載された「エカシケナル」に関する記述のいくつかを紹介する。

鉄道省『日本案内記 北海道篇』

北海道でも観光・旅行の大衆化が進んだとされる1920～30年代⁽⁵⁾になると、鉄道省、札幌鉄道局、北海道商業組合協会等が、いくつもの旅行案内書を発行した。

これらの書籍が「土人部落」等の標題のもとに紹介したのは、多くが白老や旭川であって、長万部を取り上げている例はあまり多くはなく、掲載していたとしても、「其他旧土人部落東北二十丁」のような、ごく簡素な場合もある⁽⁶⁾。そのような中で、鉄道省『日本案内記 北海道篇』（1936）は「長万部駅」のところで「南部藩長万部陣屋址」に続けて「長万部旧土人部落」の項目を設けている。紹介文は次のとおりである。

【長万部旧土人部落】長万部駅の東北約一軒半、山越郡長万部村字川向にある、海岸の砂浜に戸数二十五、人口百十あり、多く漁業を以て生活して居る。出稼等のため人口は季節によって増減があるが、噴火湾沿岸有数の部落である。部落内にあるエカシケナル（祖先の尊い家の意）と名付けられるものは構造様式凡て旧土人家屋古来の状態を保存し且つ示現するために近來新に長万部村の有志によって建設

せられたものであると云ふ。プラン長方形で柱掘立、屋根茅段々葺、四壁同じく茅を以て造り、屋内は床無くして土間に長方形の炉があり、壁際の周囲に寝台と日用品、宝物類を並置した台床がある。母屋の西南に差掛の小舎を附属し、内部は土間となり、この南に出入口を開いて居る。母屋の東側には神に供物を捧げる最も神聖なる東窓あり、南側に大形の窓二個を設け、西側にも小窓がある。東窓の屋外には祭壇を樹て、また熊檻、倉庫、便所等がそれへ周辺に造られて居る。家屋の全面には古来旧土人によって食用、薬用に供せられ、衣服等の材料に用ゐられた野生の草木類を汎く蒐集移植して居るのは観覧者にとって有益である。

北海道庁『HOKKAIDO INDUSTRY AND TOURIST』

本書は北海道庁が1936年に発行した英文の北海道観光情報冊子である。僅か24ページの小冊子であるが「The Aino」として紹介している写真は、本稿で紹介した絵葉書（図3：1・2）と同じものである。

これらについては、『アイヌ風俗館参考館建設趣意書』（1936）⁽⁷⁾が、エカシケナル保存会の活動について述べた記述と呼応する点をいくつか窺うことができる。

例えば、観光案内書の類におけるごく簡潔な紹介は、「趣意書」が「去る昭和七年には、札幌鉄道局も有益と認め、駅ホームに名所として掲示され」という、その掲示を反映した可能性を指摘できる。

そして『日本案内記』への掲載は、「趣意書」が「昨十年八月には鉄道本省より、日本案内書編纂官来村、親しく調査の上本年八月発行予定の同書第八編に掲載される旨、明言され」と述べていることに基づくものだろう。

「趣意書」は、これに続けて、「又斯界の大家数名も參觀何れも、其の目的に共鳴し更にツーリストピュロー委員も視察して、大に観覧価値あるものと認め、完成の上は内外観光団を、立ち寄りしむる事も約されし程にて」と述べているが、こうしたかたちで関心が持たれたことが、北海道庁の英文冊子への写真掲載などの背景にあったと見るべきだろう。

3 小倉氏と研究者の関係を示す資料

小倉氏の名前が広く知られてきたのは、北海道帝国大学に所属する複数の研究者の著作の中に、長万部のアイ

(5) 例えば一つの指標として『北海道庁統計書』が示す北海道内の鉄道（官営鉄道）の乗車人員を見ると、1915年の約630万人が、1925年には約2230万人へと急増している。
 (6) 『北海道案内』（第六版）北方文化協会、1935年。奥付によれば「第一版」は1924年発行であるが、第六版以外は未見である。なお、たとえ「其他」と書かれていようが、そこが観光先として紹介されていることに変わりはないことも付言しておきたい。
 (7) この資料は前稿（古原・小川 2009：77-80）に掲載している。

ヌ民族との仲介役としてその名が登場することによる。

今回紹介した資料のうち、「昭和十四年 鷹部屋博士より寄贈」と書かれたものに写る屋根組模型（図15：1）は、鷹部屋福平氏の論文図版として掲載され、酪農学園大学の管理を経て現在は北海道博物館が所蔵しているものである。また、鷹部屋氏の論文には図15：2と同一カットの写真が「小倉範三郎氏蔵」と明記して掲載されており（鷹部屋 1939b：第3圖）、写真資料の交換が双方向的なものであったことが伺われる。

名取氏による噴火湾沿岸での民族誌記述「噴火湾アイヌの捕鯨」（名取 1940）には、その冒頭に「全道のアイヌのハナレ（キテ）を収集するに當つて、長萬部村の小倉範三郎氏より、送付されたる」資料があることが明らかにされているほか⁽⁸⁾、「小倉氏並びに古老たちの好意に依り（中略）昭和十三年六月二日には、昔鯨を突いた長萬部の海にて（中略）鯨送りの儀礼に参列する機会を得た」とも記されている。

今回の資料には、名取氏が著作中で示したものと同一の写真3枚が含まれており（図15：4～6）、いずれも裏面には名取氏の署名がなされており、当時の協力関係を裏付けている。

謝辞

小倉博子氏からは、御祖父小倉範三郎氏が保管されていた貴重な資料をご寄贈頂いたのみならず、博識で人格に優れた範三郎氏の思い出など、様々なお話をお聞かせいただいた。長万部アイヌ協会の司馬哲也会長には、御祖父司馬力彌氏、御祖母司馬ハル氏が写る写真の本稿への掲載をご快諾頂いたのみならず、多くの御助力、御助

言を賜った。お二人の協力に対してまず、心より感謝申し上げます。

調査の中でお世話になった函館市教育委員会の大矢京右氏、北海道大学フィールド科学センター植物園の加藤克先生、国立民族学博物館の齋藤玲子先生にも、末筆ながら深く御礼申し上げます。

引用文献

- 小川正人 1995. 第二次世界大戦期における「戦勝祈願」のカムイノミをめぐって. アイヌ民族文化研究センター研究紀要 1: 123-138.
- 小川正人・大坂 拓 2018. 釧路市・清野写真館旧蔵写真—2017年度新収蔵資料の紹介—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要3: 139-148.
- 加藤 克編 2012. 大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究. 日本学術振興会科学研究費補助金(2009-2011年度)基盤研究(C)研究成果報告書.
- 古原敏弘・小川正人 2009. 長万部町教育委員会所蔵のアイヌ資料. アイヌ民族文化研究センター研究紀要 15: 57-83.
- 鷹部屋福平 1939a. アイヌ屋根の研究と其構造原基體論に就て. 北方文化研究報告 1: 107-161.
- 鷹部屋福平 1939b. アイヌ住居の研究. 北方文化研究報告 2: 123-161.
- 鷹部屋福平 1940. アイヌ住居の研究—アイヌ家屋の地方的特性(附録アイヌ建築語彙). 北方文化研究報告 3: 209-265.
- 鉄道省編 1936. 日本案内記 北海道篇. 博文館
- 名取武光 1940. 北海道噴火湾アイヌの捕鯨. 北方文化研究報告 3: 137-161.
- 北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・W・カーティスコレクション他資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第32集.
- 北海道庁 (Hokkaido prefectural government) 編 1936. HOKKAIDO INDUSTRY AND TOURIST. 北海道庁 (Hokkaido prefectural government).

(8) 名取が図示した資料は（名取 1940：第一圖）、現在の北大植物園・博物館の収蔵番号9785と見られる。



1 185189-37-2



2 185190-1-2



3 185189-23-2



4 185190-33-3



5 185190-33-4

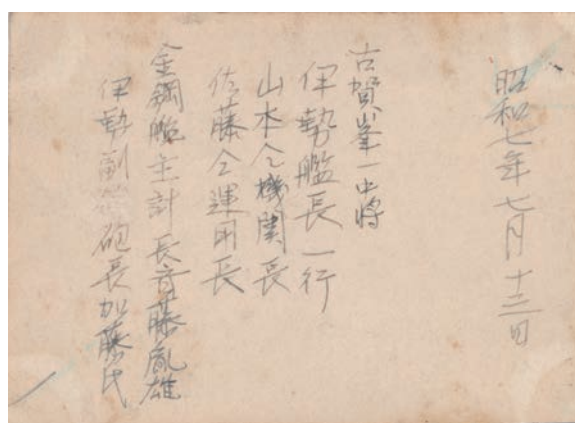
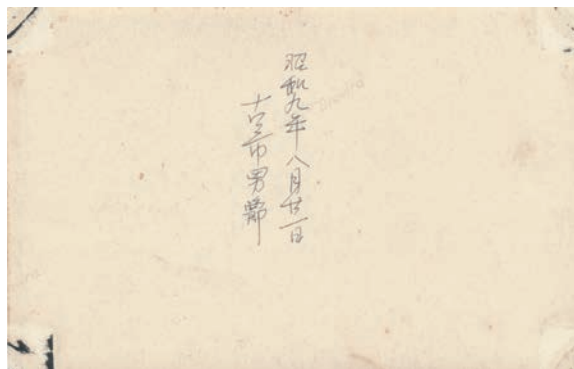


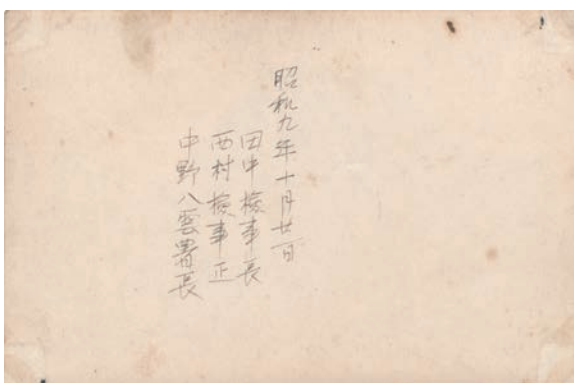
図3 エカシケナル「I期」関連資料



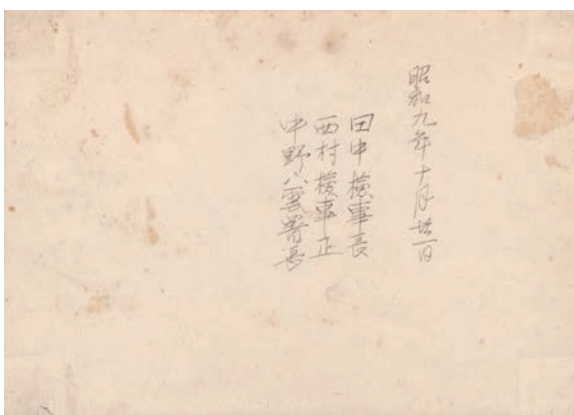
1 185190-11-2



2 185190-9-2



3 185190-26-1



4 185189-27



5 185190-30-1

図4 エカシケンル「Ⅱ期」関連資料



1 185190-29-1 「昭和十年十月十二日 小樽旅行団」



2 185190-29-2 「昭和十年十月十三日 余市旅行団」

図5 エカシケンル「Ⅲ期」関連資料



1 185190-33-2 「昭和十一年八月二十五日 伊藤利孝氏自寫」



2 185190-33-1



3 185190-33-5

図6 エカシケナル「Ⅳ期」関連資料



1 185190-31-2 「恵存 小倉範三郎様 日華製油 川村幸雄 昭和十一年十月 九月二十四日撮影」



2 185189-26



3 185189-23-1

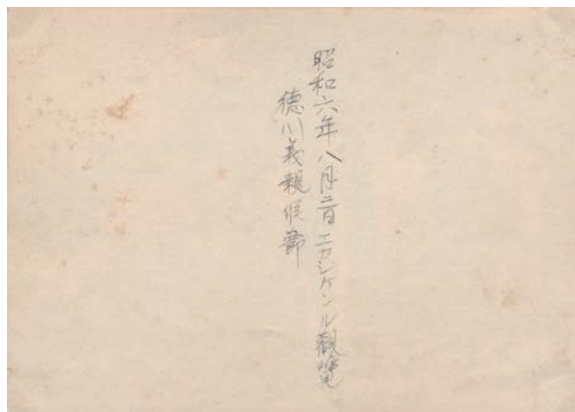


4 185189-25-2

図7 エカシケナル「Ⅳ期」関連資料（1）及びそのほか（2～4）



1 185190-11-1



2 185193-16-1



3 185190-4-1

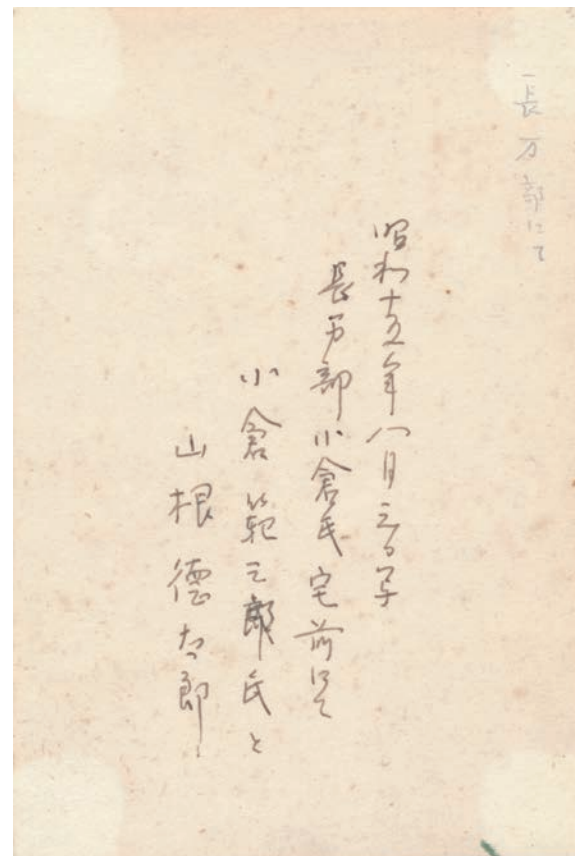


図8 各種の来客



1 185189-13-2



2 185189-14



3 185189-28-1「昭和十一年十月二十九日 / 小島教三氏撮影」

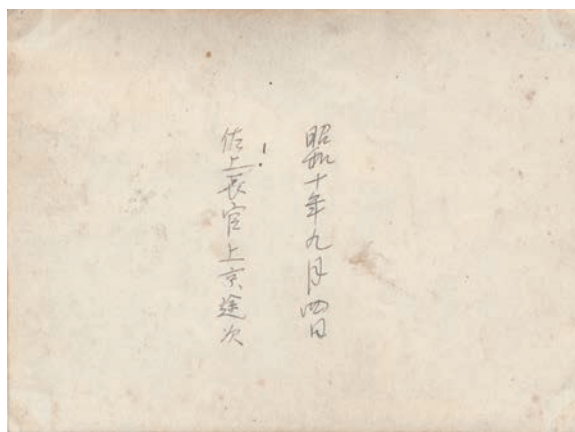


4 185189-28-2「昭和十一年十月廿九日」

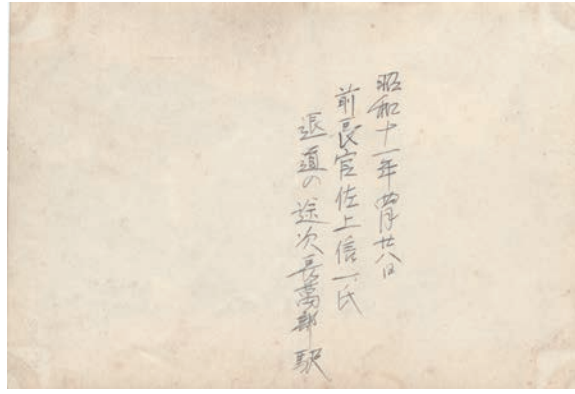
図9 肖像写真ほか



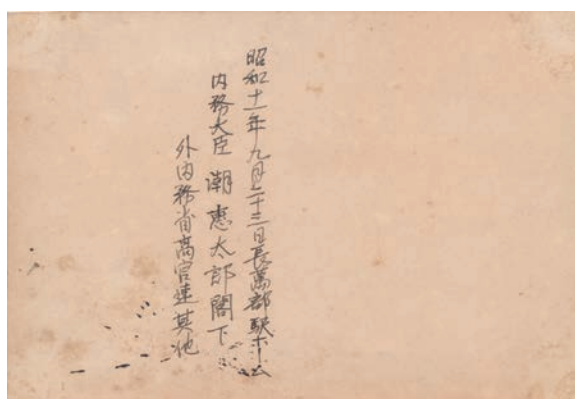
1 185190-3-1



2 185190-3-2



3 185190-19-2



4 185190-23-1

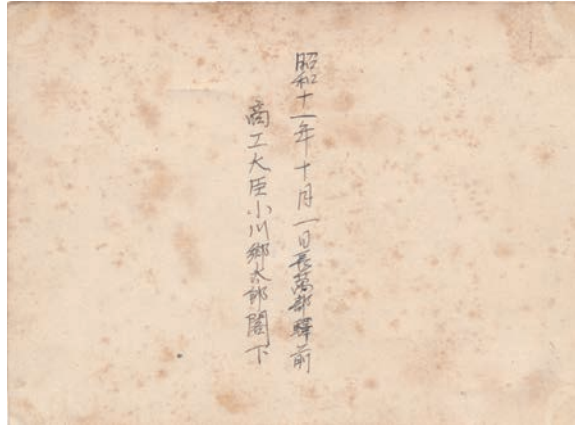
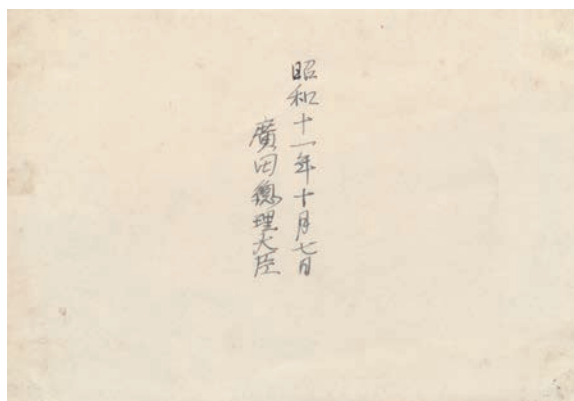


図10 著名人の歓迎①



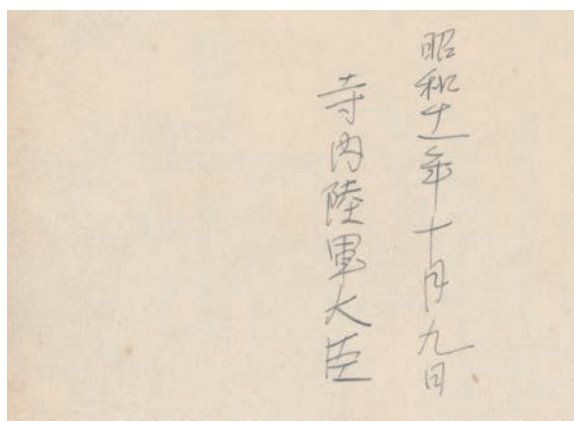
1 185190-19-1



昭和十一年十月七日
廣田總理大臣



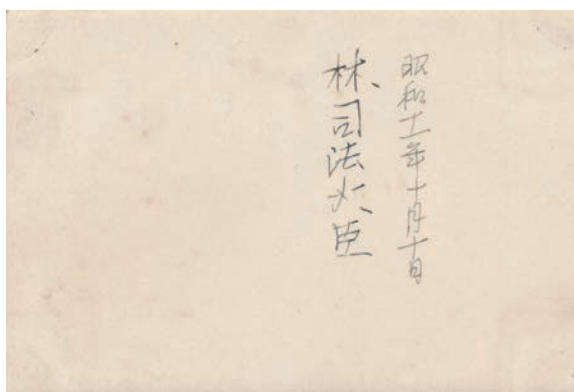
2 185190-21-2



昭和十一年十月九日
寺内陸軍大臣



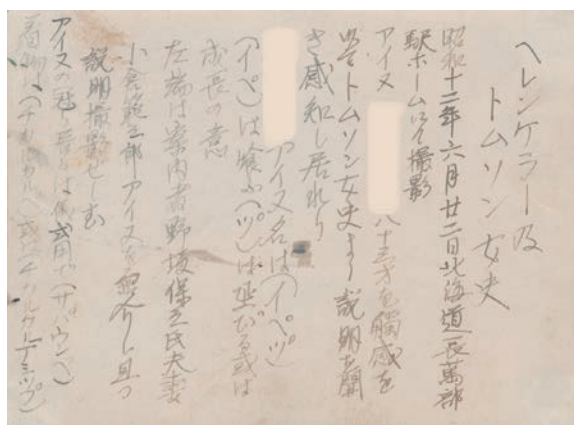
3 185190-21-1



昭和十一年十月十日
林司法大臣



4 185190-8-2



ヘレンケラー及び
トムソン女史
昭和十三年六月廿二日北海道長万部
駅ホームに撮影
アイヌ
ハナミチを觸感を
以てトムソン女史より説明を聞
き感謝し居り
アイヌ名は(イペツ)
(イペ)は喉(ツ)は鼻(イ)は
舌の意
左端は密内省野模倣之氏夫妻
小倉龍三郎アイヌを紹介し居る
説明板あり
アイヌの語り手は長岡(サバウシ)
番物(ナカハル)氏(エカシケル)
(イペツ)は喉(ツ)は鼻(イ)は舌の意

図11 著名人の歓迎②



1 185189-22-2



2 185189-30



3 185189-29



4 185189-31



5 185193-14-2



6 185189-22-1



7 185189-25-1

図12 熊送り儀礼関連資料



1 185193-48-1 「昭和十七年九月五日撮影 旭橋渡り初メ式」

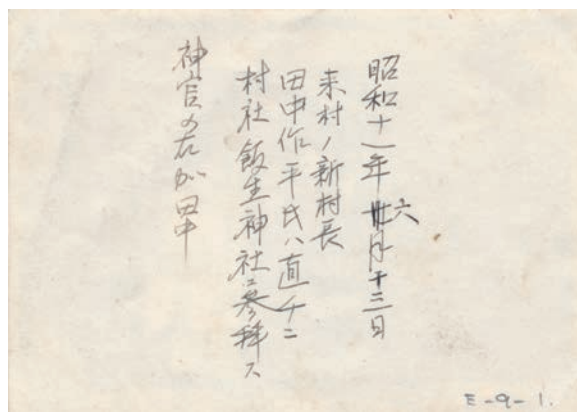


2 185189-19 「昭和十八年戦勝祈願祭 拾貳月八日」

図13 各種行事への参加



1 185193-9-1



2 185193-27-1



3 185193-67-1

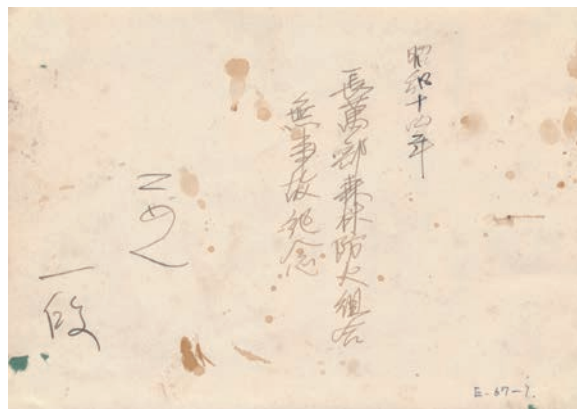
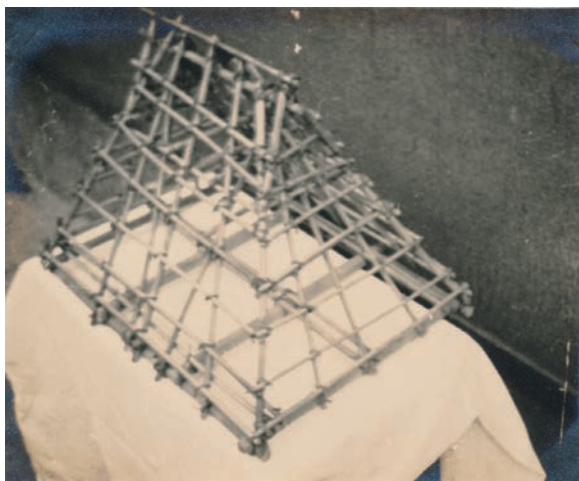


図14 様々な社会活動を担う姿



1 185189-2



2 185189-3



3 185190-25-1



4 185189-16



5 185189-18



6 185189-17

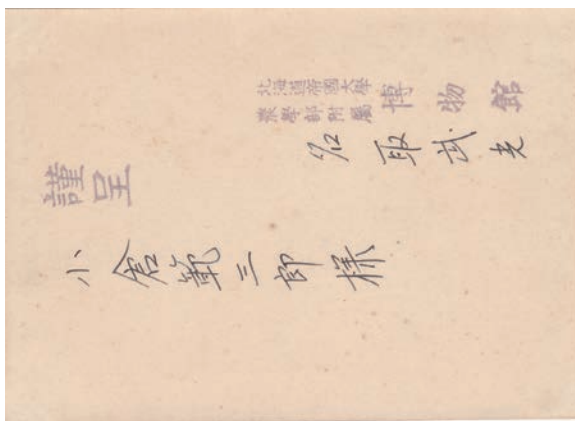


図15 小倉範三郎氏と北海道帝国大学所属研究者の関係を示す資料



1 185196 「室蘭支庁長殿 明石土人組合長宅 訪問記念」



2 185189-5 「日高静内 平取」



3 185189-4 「静内」



4 185193-14-1 「平取村」

図16 各地のアイヌ民族に関する資料



1



2



3



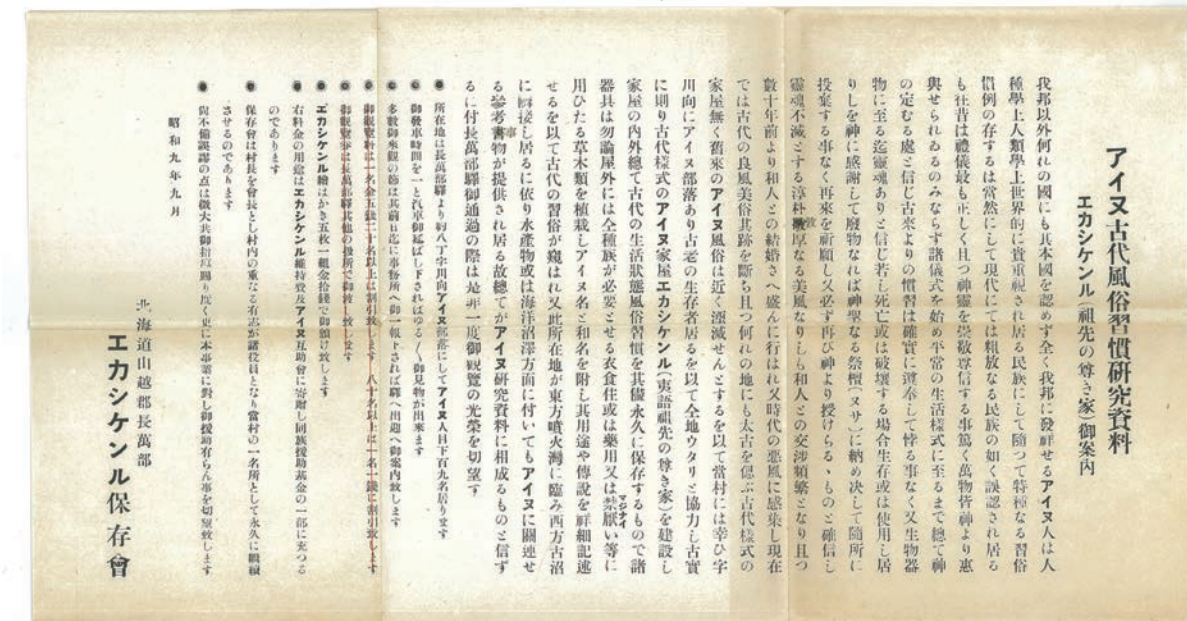
4



5



6



7

図17 参考資料① 『アイヌ古代風俗エカシケル (祖先の尊き家) 絵葉書』(国立民族学博物館所蔵)



1



2



3



4

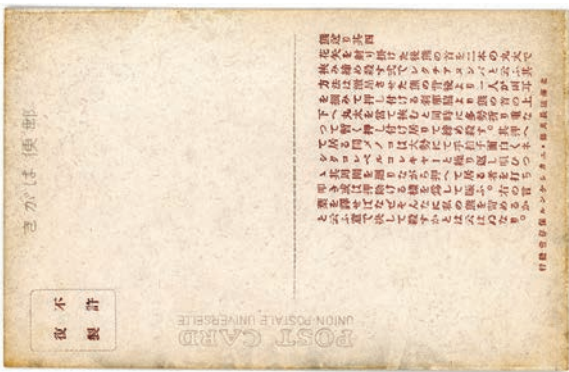
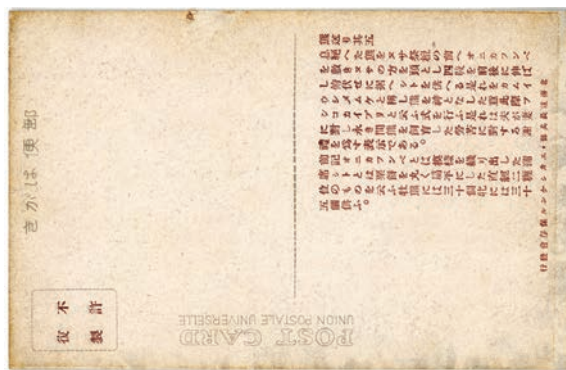


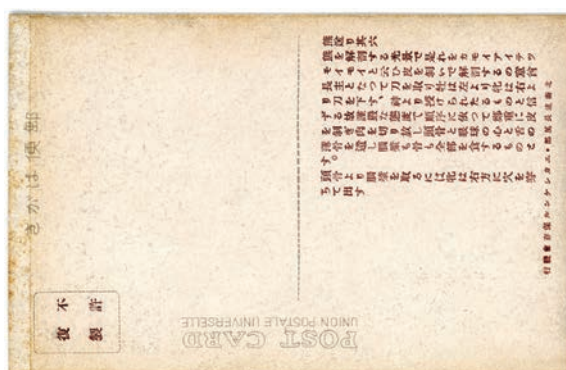
図18 参考資料② 『アイヌ風俗熊送り実況絵葉書 八枚組』 其一～四 (国立民族学博物館所蔵)



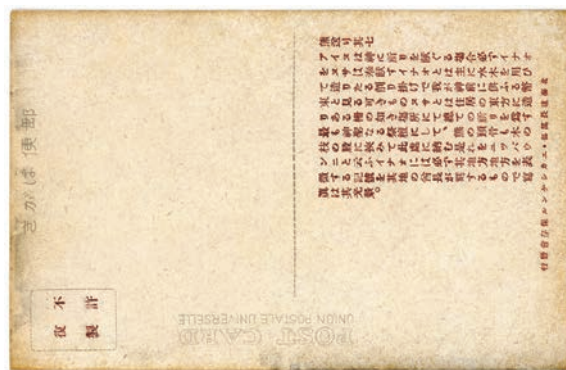
1



2



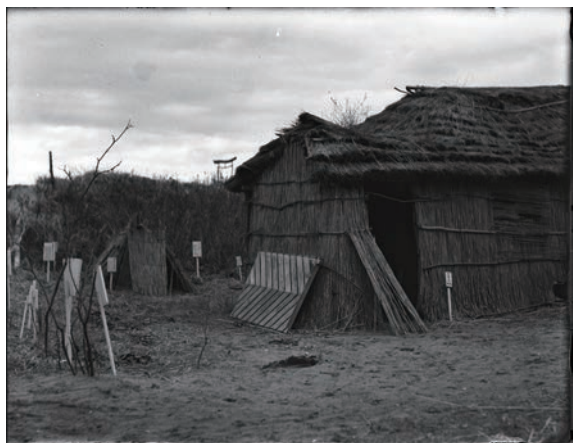
3



4



図19 参考資料③ 『アイヌ風俗熊送り実況絵葉書 八枚組』其五～八（国立民族学博物館所蔵）



1 HPN_50282



2 HPN_50281



3 HPN_80036



4 HPN_80037



5 HPN_50283

図20 参考資料④（北大植物園・博物館所蔵）

表2 関連新聞記事

函館毎日新聞

1928年12月18日付3面 長万部の熊送り 既報の如く長万部村字川向ひにて執行するアイヌ熊送りは愈々来る二十三日と決定す此地方にて是を行ひしは今より十年以前にて今後も■近き将来には行ふ見込なき故諸方面よりの応援もありて特に盛大に行ふ事となりしを以て近郷は勿論遠く札幌圏等よりも既に団体見物の申込みありて当日は定めし盛況ならん
1931年7月17日付夕刊2面 長万部にアイヌの家 視察者の為に新しく建設 長万部村にはアイヌ部落ありて時々視察者来るも何れも古式の完全なるもの無きを慨し元首長司馬力彌他■氏で今回字川向古式にのっとり一屋を建設し名をエカシケンル即ち尊き祖先の家と名付け部落の共有とし内にアイヌ器物を蔵し全部に説明を附し来訪者の便を計る事となり目下屋内工事中である
1932年7月12日付2面 柳澤伯アイヌ部落視察 長万部へ去る四日貴族院議員伯爵柳澤保恵伯は東日主催の本道周航観光団に加り加茂丸で室蘭へ上陸同伯のみ小樽行きの途次長万部駅へ下車駅長の案内で同地アイヌ部落にある古代の家エヤシケンル^(ママ)(祖先の尊き家)観覧今日他に存在せざるアイヌ古代の状態保存に共鳴され若干金を寄贈小樽へむけ出発された
1933年4月10日付夕刊2面 長万部に新名所 長万部字川向にあるアイヌ古代の家エカシケンル(祖先の尊き家の義)はアイヌの元始的生活状態其儘を保存会後援で永久に保存し斯学研究資料に供せんとするものであるが今回鉄道局の認むる処となり局報を以て発表され近く長万部駅ホームに案内が掲示される由
1934年10月27日夕(4) 検事長一行アイヌ部落視察 長万部村川向アイヌ部落は駅より約八丁で同地の名所として保存されて居るアイヌ古代様式の家(エカシケンル)和訳せば祖先の尊き家視察として去る廿一日札幌控訴院田中検事長同監督書記嶺瀧主事函館地方裁判所西村検事正同検事局石澤監督書記及中野八雲署長一行来村エカシケンル管理者より其風俗習慣より同村先住民族即ち石器時代住民遺跡の状況等現物に就き聴取されアイヌ古老と共に記念撮影の午後四時廿四分八雲町へ向け出発された(写真はエカシケンル及熊を飼養する細丸木造りの檻エペセツ^(ママ)と共に撮影の一行)
1935年2月22日付夕刊2面 アイヌ古式の熊送り式 川向部落で挙 長万部村字川向アイヌ部落では来る二十四日正午よりアイヌ古式の新年儀式(アシリパエカムイノミ)を酋長以下男女総出でアイヌ古代の家エカシケンルで挙行するが同時に国縫□□□□君が射ち獲った大熊の頭をエカシケンルへ祭るので其儀式(ヘベリサパアオマンデ)をも執行するが右は熊送り同様の儀式でアイヌ古代の風習が実演され哀調を帯びたメノコのユーカラ其他の歌謡がきかれるならん

1935年5月31日付2面

アイヌ漁民救済陳情
支庁対策考慮

去る二十八日長万部漁業組合理事及渡島支庁を訪問同村内アイヌ部落中漁業関係者が連年の不漁で甚だしく生活に難渋しつつある事情を述べ定置建網若しくはそれに類似の漁業権を附與して生活の確立方を陳情したが支庁当局としては現在同地域に建網を入れる余地は全くなく或は敷網を許可して救済の便法たらしむる様な意向もあり対策については相当考慮を払っている模様である

1935年7月15日付夕刊4面

川向愛奴部落に珍資料『エカシケルン』^{〔ママ〕}
鉄道案内記事にも掲載

（長万部発）長万部駅より約八丁字川向ひアイヌ部落にある同族古代生活状態其儘の家エカシケルン調査のため鉄道省運輸局旅客課日本案内記編纂係川村眞一氏は去る七日詳細調査されたがエカシとは祖先ケルンとは尊き家という義で普通の家をウニヒ或はチセと称するが同書には尚古来アイヌが衣食住又は薬用或は魔除け禁厭等に用いた草木類まで植え置き和名とアイヌ名を附し其用途用法を詳記し実物に依って異風習慣を一目瞭然たらしむる施設で研究資料とも趣味的参考ともなる有益なるものと認められ日本案内記第八編に掲載され本年度内に出版される由尚去月二十八日も道庁嘱託杉山壽榮男氏も視察され有益なるものと断定されている

1935年8月10日付夕刊4面

蝦夷が島の昔を偲ぶ 熊祭りに観衆殺到

後志共進会寿都協賛会第一の呼び物たる熊祭りは五日午前九時より挙行の筈なりしも降雨のため一時中止の外なきこととなり居りたるも十時頃から天候快晴となり愈々挙行することとなり木戸を開けたに観衆は共進会前の道路に押しあいいるため雪崩を打って入場し流石の係員数名も一時は手のつけ様もなき程の稀有の観覧者にて約四千人余と註せられやがて長万部村の司馬酋長は部下十七名を引き連れ入場し本社長の長万部特派員小倉氏の熊祭りの古式による説明がありて町役場に飼養し居れる島牧狩場山産『月の輪ひぐま』^{〔ママ〕}ををりの儘祭場にひき出して七名のメノコが其周囲異様な声を出して踊りそれより折小屋より引出して種々な儀式の催しの後、熊はアイヌのために神の犠牲となった終ったのは午後六時頃であった市内は熊祭りの為近村は申すに及ばず遠くは余市、岩内、倶知安方面の観覧のため非常な雑踏を極めこんな賑いは開町以来のにぎわいであった

1936年5月9日付夕刊1面

アイヌ風俗の参考館を建設

山越郡長万部村ではアイヌ風俗の参考館を建設すべく準備を進めているが之は約三千円の経費を要するも同村のみの寄附では之が目的の達成を期せられないので今回建設者を代表してエカシケルン保存会々長の藤原長万部村長より岡本函館商工会議所会頭その他に支援方を要■して来た

1936年7月6日付夕刊2面

川向のエカシケルン 一躍世界的名所の折紙
近くアイヌ部落で古式の祝宴

（長万部発）長万部村川向アイヌ部落にアイヌ人の敬神崇祖礼儀を尊重した美風風俗即ちアイヌ文化を紹介するためアイヌ古老が古式に則り建設しある祖先の尊き家「エカシケルン」が斯学者の認むる処となり本月鉄道省が発行の（日本案内記）北海道編に全景写真のほか五十四頁及び百十二頁に図面■■■詳細な記事が掲載されいよいよ世界的名所として内外に紹介される事となつたので大いに喜び近日アイヌ人男女数十名集合盛大なアイヌ古式祝宴を催し余興にはメノコ得意の踊りハンチカハンドメ^{〔ママ〕}其外数十番を演じ昔を偲ぶ由故当日は見物なるべし

1936年9月16日付3面

村道の修理奉仕 長万部アイヌの敬神

（長万部発）長万部村社八日よりの大祭に当り字川向にも神輿の渡御あるが同地に通ずる村道は破損甚だしく馬車の心棒を没する程なるに村財政の都合か修理せず民衆は愚か御輿の渡御に支障あるを恐れ敬神の念より大祭前二日に馬車十七台でバラス二百台搬入二十三戸のアイヌ部落より元酋長末裔司馬力彌氏が鶴の一声で総出動人夫十二名も参加泥濘を極めた大悪路も忽ち草履道に修繕完成神輿渡御に支障なからしめたので一般からも感謝されている

1936年10月27日付夕刊3面

今も変わらぬ熊まつり 廿五日いわない龍星会主催

岩内龍星会主催の熊祭は二十五日午前八時より湯殿山裏手広場において行われ之先長万部村川向部落のアイヌ酋長司馬力彌氏（五八）は二十三日岩内に至り龍星会会員多数の出迎えを受け直に島の家に至り檻に飼われている熊の実物検分をとげたが右熊は最も獐犢性を有するひぐまの牡四歳で其特征として足と手の長いことであつて之を会場迄運ぶには大仕事なので三分径のワイヤーロップでたすきかけにし連れ込むだもいである

1937年5月22日付2面

アイヌ族 研究に生きたる史料 尊い祖先の家（エカシケナル）

破壊しても保存会は涼しい顔

本道旧土人の古代の生活状態を後世に伝うべく本道史研究家にとりて唯一の生きたる文献として有名である山越郡長万部町川向に所在する尊い祖先の家（エカシケナル）の保存会は今日では全く有名無実の存在となっている此の「エカシケナル」には即ちアイヌ族の古代の生活状態を後世史家の研究に役立てる為に家屋、倉庫、舟其他アイヌ族の実生活に要したる一切の参考物を集めているもので偶々昨年本道大演習挙行にあたり畏くも聖上陛下におかせられては川向部落民代表を行在所に召され拝謁を賜りたるが其後「エカシケナル」は強風のため破壊したる為部落民は保存会に対して再建を切願したるも経費なきを理由として復活をみず今日各方面より相当多くの参観人あるも破壊せられているためその目的を達する能わず此処に於て同アイヌ部落民は保存会に於て復活が不可能ならば自分等の手で復活すべしと申出たるも何等の答もなく止むを得ざるので旧土人組合評議員代表司馬氏は去る十二日渡島支庁に石川支庁長を訪れ「エカシケナル」の永久保存方を陳情したるに石川支庁長もアイヌ族の為に是非再建せらるるよう激励せられ自分としても大いに盡力すべしと答えたるが保存会の態度は各方面より不評を買っている

1937年6月23日付2面

世紀の奇跡 ヘレンケラー女史 函館から小樽へ

「三重苦の聖女」に世紀の奇跡を滞函中随所に具現せしめて感激と驚異をばらまいており昨二十一日は午後一時より函館盲啞学院に赴き此れ等人生にハンデーある可憐な人々への慰めと激励を與え終わって午後四時自動車を駆って夏空の快味を満喫して大沼に清遊し アイヌを見えぬ眼の指頭で伝統とロマンスをひもとき、熊には「オーワンダフル」の叫びをあげ少女の如く喜びボートで遊び同八時帰函した
同女史は愈々名残を惜んで本二十二日午後一時二十分発急行で小樽に向け出発さよならを告げた

1937年6月23日付2面

エカシケナル再興協議会 廿二日長万部で開く

既報長万部に設けられた旧土人の生活状態を詳細に原形にとどめ之を永久に保存して後世史家の研究材料として重大な役割をあてられているエカシケナル再興保存に対してはかねてより旧土人部落代表たる司馬力彌氏により叫ばれているが今廿二日午後一時より同村役場に於て保存会役員及び村議会有志参集して再興につきて協議会を開催し種々協議をとげる処あった

1937年6月27日付2面

熊祭は珍しい「港まつり」の行事に

第三回港まつり行事も既に決定発表され愈々全市あげて歓喜のるつほと化す日もアト数日に迫り街頭は早くも港音頭のレコードが氾濫して華やかな前奏曲はおまつり気分を漂わせ街の要所々々の踊り舞台には港音頭に乗って市民が踊り抜き浮いた／＼の明朗一色に塗って来たがさらに発表行事に原始的本道前人特有の熊まつりを加うべく商工会議所■本総務部長が長万部方面へ出張交渉中であつたが愈々具体化し豪華なプランへの追加で来る二、三日の両日市内二ヶ所に於て「熊まつり」を挙行することとなつた、挙行場所は函館公園と亀田方面の二ヶ所でふすもの^(ママ)の如く之に参加するアイヌ人は十四名であるが此の趣向はさらに一層全市的■気を湧き立たせるものと期待せらたている

1937年7月4日付2面

熊祭りの人 公園は群衆でもみ合う

港まつりの珍趣向一亡ひ行くアイヌ民族の儀式熊祭りは港まつりの第二日目と最終日のきょう公園広場と新川町税務署構内に於て午前午後の二回にわたつて挙行され北方民族の獵本生活に基いた儀式を見んものと街の人気を煽り数千の観衆で埋め長万部首長司馬力彌氏等一行十三名が世話役の商工会議所鶴本口務部長、平塚庶務課長の挨拶に次で熊祭りの祭式の型が供された正面のヌサシヤン^(ママ)神垣の左右に太刀、弓矢、刀柄、つば、よろい籠（概ね略す）を並べ供物をあげアツシに盛装凝らしたアイヌが座に着き、静粛に神に酒を捧げ漸次酒を吞干すと一団の入墨のメノコは悲哀なる声をしばらく「ホウイ」と云い乍ら手拍子、足拍子面白く歌い踊る、長老が熊に何か口述し見物人に花矢を射させ酋長は機を見て丸太で熊の首を上下から挟み絞めメノコは熊の姿の痛ましさに声をあげて嘆き悲しむ函館には珍しい熊祭りの式であつた

小樽新聞

1939年1月26日付7面

ウタリーの盛儀

古式熊祭

長万部アイヌが行う

亡びゆくウタリーの民族行事「熊祭り」はアイヌ人の最も盛儀とする式典であるが同族の衰微と共に荘厳神聖なウタリーの行事も年々さびれ僅観光北海道の宣伝として膾炙されるのみとなっている、来二十九日午前一時から長万部エカシケナル保存会主催で川向アイヌ部落において出場アイヌ三十五名に保存会で飼育の三歳熊を古式にのっとして絞殺し二日間にわたって盛大な熊祭りを施行することになった第一日目は檻から熊を式場に引出して引導、弓射の式が敬虔なアイヌの手によって行われ花矢を射て斃された熊を祭壇にそなへ解剖して一日目を終り二日目は熊の頭を祀る盛大な同族の酒宴があって熊の靈魂を靈界に送り閉式

1939年1月31日付夕刊2面

熊の靈魂を天国へ 鮮血・コタンの白雪を彩る 長万部熊祭りの盛儀

ウタリーの民族行事「熊祭り」はアイヌの古典的盛儀で観光北海道の代表的なものであるがウタリーの衰微によって近頃はコタンでも往年のような神聖荘厳な古式熊祭りは漸く消滅しつつあるこの頃一二十九日長万部川向アイヌコタンで行われたエカシケナル保存会主催の熊祭りは酋長司馬力彌が飼育した三歳の牡熊を古式にのっとして斃し同村のアイヌ八雲、豊浦、白老の部落から参集した五十数名の男女が二日にわたって同族の最高盛儀へペリヨマンデ（熊送り）を雪深いコタンの濱で近郊各市から見物に繰出した三千の観衆に圍繞されて施行した、午前十時酋長司馬力彌が司会し神となる熊は厳かな祈詞の下に屈強なアイヌの若者数名によって首へロープをかけて檻から引き出された、傍らでは首飾り、耳輪、刺繍模様のアツシに盛装した大勢のメノコは円陣をつくって身振手拍子面白く「タラパーフホーエー」の唄を合唱して式場へ送り出される熊を中心に踊り廻る、やがてイナホ（削花）と供物で飾られた祭壇の前に引き出された熊は若者たちに引廻され猛り狂い物凄い咆哮を続けて興奮すれば哀韻切々なメノコの歌舞はコタンの聖なる行事を賑やかに彩り陣羽織に太刀を佩いた盛装の酋長が「いま熊の靈魂を天国へ送る」と祈詞を唱える選ばれたエカシの射るチロシ（花矢）は猛りたつ熊へ発止と命中それを合図に四五人のアイヌが丸太で熊の首を挟み折重なって締め付けると断末魔の唸り声を上げて熊は圧死されカムイとなって靈界へ昇天した、かくて供養の式に移り息絶えた熊は祭壇の前の筵に俯伏せに供えられ一同は熊の靈魂と天のカムイに黙祷と祈詞を唱えつつ熊の頭に御神酒を捧げ荘厳慎重に終り皮剥の式は酋長が最初に熊の腹部をマキリで切り各自はそれにならって手際よく解剖する、鮮血はコタンの白雪を染て凄惨な光景で、咽喉と腹部から流れるニゴリ（血）を争って茶碗に受けて呑む、解剖された熊の「頭」はエカシが背負い酋長の家の窓口から屋内の祭壇に運び多数のアイヌたちは室内一杯に円陣をつくり朱りの大盃に濁酒を呷って徹宵饗宴を開いた、二日目は熊の頭を祀る盛大な最後の式を行った（写真は熊祭り）

※判読が困難な文字は■、個人情報に関わる削除部分は□で表した。

New Items Related to the 'Ekashi-kenru' Ainu Culture Exhibition Facility:

Introduction New Acquisitions to Hokkaido Museum's Collection in 2019

OSAKA Taku and OGAWA Masahito

On December 18th, 2018, the museum received a donation from Ms OGURA Hiroko, a relative of Mr OGURA Hanzaburo, who was the publisher of the Oshamanbe Tribune — a newspaper in the township of Oshamanbe. This paper introduces 62 photographs relating to the Ainu people among the materials which have been registered at the museum as of October 1st, 2019.

Observing the transition of the photographed buildings, we found that over the period from the opening of 'Ekashi-kenru' in 1931 to 1936, the building underwent at least three large-scale renovations.

Of the donated items, the final photograph of 'Ekashi-kenru' is dated 1936. An article on page 2 of the Hakodate Mainichi Shimbun Newspaper's May 22nd, 1937 edition reports that 'Now, Ekashi-

kenru exists in name only', with the cause said to be 'destruction by heavy winds'. The Ogura photograph collection itself continues without interruption, including photographs of the opening ceremony of Asahi Bridge in 1942 (Figure 13:1) and the 'prayer for victory at war' ceremony in December 1943 (Figure 13:2). The complete lack of other photographs related to 'Ekashi-kenru' suggests not a coincidental loss of photographs, but rather that activities to operate exhibition facilities focused on restored Ainu dwellings had ceased. An article on page 2 of the Donan Shinpo newspaper's October 30th, 1952 edition reported that Mr Ogura relocated to Sapporo, and mentioned that 'Mr Ogura managed Ekashi-kenru until around the year Showa 11 (1936),' further supporting our supposition.